新しい地方経済・生活環境創生会議（第６回）議事要旨

日　　時：令和７年４月 12 日（土）13:00-15:00

場　　所：福岡県北九州市　北九州国際会議場＋オンライン開催

議　　題：１　開会
　　２　議事
　　スタートアップ、稼げる地方
　　３　閉会

配布資料：資料１　片山氏説明資料
　　資料２　福岡氏説明資料
　　資料３　米澤氏説明資料
　　資料４　青木氏説明資料
　　資料５　竹山氏説明資料
　　資料６　サーズ氏説明資料

机上配布資料：中村委員提出資料

出 席 者：鳩山　二郎　　新しい地方経済・生活環境創生担当副大臣
　　河合　雅司　　一般社団法人人口減少対策総合研究所理事長
　　小林　味愛　　株式会社陽と人代表取締役
　　細川　珠生　　ジャーナリスト
　　増田　寛也　　日本郵政株式会社取締役兼代表執行役社長
　　片山　憲一　　北九州市副市長
　　福岡　広兵　　COMPASS 小倉事務局長
　　米澤　恵一朗　　九州工業大学副理事
　　青木　睦子　　ハインツテック株式会社代表取締役社長
　　竹山　将志　　9Capital 合同会社代表
　　ニック・サーズ　　有限会社フクオカ・ナウ 代表

○増田座長　それでは、時間より少し早いようですが、皆さんおそろいでございますので、ただいまから、第６回「新しい地方経済・生活環境創生会議」を開催いたします。

本日は、地方開催としては４回目、福岡県北九州市での開催ということになります。

テーマとして「スタートアップ、稼げる地方」、これを今日は、それぞれの取組などについて御説明いただきまして、意見交換をさせていただきたいと思います。

それでは、本日の発表者の方々を御紹介申し上げたいと思います。

北九州市副市長、片山憲一様です。

続きまして、COMPASS小倉事務局長、福岡広兵様です。

九州工業大学副理事、米澤恵一朗様です。

ハインツテック株式会社代表取締役社長、青木睦子様です。

9Capital合同会社代表、竹山将志様です。

有限会社フクオカ・ナウ代表、ニック・サーズ様です

次に有識者委員として、河合委員、細川委員のお二方がこの会場にて御出席、そして、桑原委員、小林委員の二方がオンラインでの御出席ということになります。皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。

次に、本日の資料でございますが、議事次第と発表者の皆様の資料をお手元にお配りしておりますので、そちらを御覧いただきたいと思います。

それでは初めに、鳩山副大臣、片山北九州市副市長より順に御挨拶を頂戴したいと思います。まず、鳩山副大臣、どうぞよろしくお願いします。

○鳩山副大臣　ただいま御紹介いただきました、副大臣の鳩山二郎でございます。

本日は、皆様方、お忙しい中、本会議に御出席いただきまして、ありがとうございます。

今日は、さすが北九州市ということで、スタートアップの話を中心に発表されるということで、私も本当に期待をしていて、最後まで会議に出たいのですが、今日は、久留米で、所用があるので、最後まで参加することができないことを、まずはおわびを申し上げたいと思います。

久留米から北九州市は決して近くなく、90分ぐらいかかるのですが、車の中で昔のことを思い返していました。私は、わずか３万5000人以下の大川市で市長をしていました。財政力も低くて、とにかく経常経費は９割を超えているわけです。厳しい自治体は。市長が新しいことをしようと思っても打てる予算なんか、体力なんか全くない中で、10年前は私、市長でしたから、地方創生という法律ができたときに、わずか私は３年３か月の市長人生でしたけれども、こんなにわくわくする政策はなかったです。やはり、基礎自治体がわくわくして政策を打てるという地方創生は、本当に大切な政策だと思います。

私はいろいろあって、私の父が急死して、補欠選挙に出るために市長を辞めたのですが、私自身が地方創生でやろうと思ったことは、その後任の倉重さんという方に全部バトンタッチして、大川は家具の町ですから、家具にフィーチャーした地方創生をしました。面白い、いろいろ政策を打ちましたけれども、具体例を一つ挙げると、大川は家具の町ですか

ら、家具といえば、やはり世界的にイタリアが一番すごいので、イタリアのデザイナーに大川に来ていただいて、大川家具とコラボして、イタリアのデザイナーがデザインした家具を作りました。これが、結果的にうまくいったのか、打ち上げ花火的で終わってしまったのかというと、残念ながら若干打ち上げ花火的で終わってしまったのですが、私は、地方創生はそれでいいと思っているのです。

例えば、果敢にチャレンジして、失敗したらまた違うゴールが見えてきますから。新しい形で目指す形が見えてくるので、大事なことは、何度失敗しても果敢に基礎自治体がチャレンジし続けられる、そういう地方創生を我々は作っていかなければいけないと思っております。

この間の水曜日ですが、いわゆる石破総理の肝煎りの、伴走型地方創生の、その激励式というのがあって、首相公邸に私も行きました。そのときに石破総理がお話をされた内容が衝撃的で、今、1億2000万人の万人の人口が100年後は5,000万人、200年後は1,000万人で、300年後は450万人。450万人ということは、福岡県が500万人ですから、福岡県の県民の人口よりも減ってしまう。このまま東京一極集中あるいは、言いにくいのですが、福岡市一極集中のような形を作っていけば、このままのトレンドであればそうなってしまうので、まさに地方創生はしっかりとしていかなければいけないと思っています。

厳しい財政状況の地方市長を経験した私として申し上げると、体力のある自治体が行政サービス合戦を仕掛けてしまうと、結局、体力のあるところの一人勝ちになってしまうので、我々は、基礎自治体の自主性や自立性を大切にしなければいけない中で、そういった行政サービス合戦が過度にならないような、そういう形の地方創生というのを我々は将来的には作っていかなければいけないと思います。

いずれにしろ、今日は皆様方、スタートアップのすばらしい発表をしていただけるということで、生で聞くことはできませんが、後でしっかりと秘書官から話を聞きますので、ぜひ今後も皆様方、すばらしい地方創生のためにご尽力いただきますようにお願いをして、少し長くなりましたけれども御挨拶といたします。今日はありがとうございました。

○増田座長　副大臣、どうもありがとうございました。

それでは続きまして、片山副市長に御挨拶をお願いします。

○片山副市長　皆さん、こんにちは。

本日は鳩山副大臣、委員の皆様におかれましては、北九州市にようこそお越しいただきました。本当にありがとうございました。大変光栄に思います。

北九州市は、これまでも国の各種支援をいただきながら地方創生の取組を進めてまいりました。昨年3月、その基本方針を示す地方版の総合戦略とも言えます北九州市基本計画を新たに策定したところでございます。新たな地方版総合戦略におきましては、本日のテーマであります「稼げるまち」、これを実現するということを最優先課題に挙げておりまして、その果実を、彩りある町とか安らぐ町であるとか、そういうことに使っていく、市民生活の環境の向上につなげていく、という好循環をつくり上げることを掲げてございま

す。

この優先課題の「稼げるまち」の実現に当たりまして、スタートアップにとても力を入れております。イノベーションを加速させることは当市には欠かせません。そのためには、スタートアップにまず力を発揮していただく、これが一番重要だと思っております。

政府によるスタートアップ育成５か年計画におきましても、スタートアップこそ社会課題の解決と経済成長を担うキープレーヤーと位置づけられておりますので、我々としても、スタートアップを支援することで、北九州市も新たな取組にチャレンジしていく。それにより地方経済を牽引するスタートアップを生み出していきたいと考えております。

今日は、ここに並んでおられるスタートアップの皆様から様々な御知見が紹介されると思っております。とても楽しみにしております。結びに、この会議が本当に実りあるものになりまして、これからの北九州、もしくは日本の発展に寄与することを祈念いたしまして御挨拶に代えさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○増田座長　どうもありがとうございました。

それではここで、所用によりまして鳩山副大臣は御退席されます。副大臣、どうもありがとうございました。

（鳩山副大臣退室）

○増田座長　それでは、本日の議題でございます「スタートアップ、稼げる地方」などに取り組まれている方々から、それぞれの取組について御説明をいただくのですが、時間が非常に限られておりまして、この会議の後、現地視察も入っておりますし、意見交換の時間もできるだけ長く取りたいということで、それぞれのプレゼンは、恐縮ですがお一人様10分にて、時間厳守でお願いしたいと思います。

御発表いただく順番は、お座りいただいている順番にさせていただきまして、初めに、北九州市副市長、片山さんからお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

○片山副市長　続けての発言になりますけれども、まず、北九州にせっかく来ていただきましたので、北九州の紹介からしたいと思います。

まず、私ですが、仕事を始めまして50年になります。東北大学の工学部を出て北九州に戻るわけですが、仙台にいるときに、北九州のことを仙台の人は知らないのです。「え？北九州？」と後ろが上がると。北九州をどうにか有名にしたいなと、そんな気持ちもあって市に入って働き始めて50年になりますが、いろいろな分野で働きました。最初はインフラ作りから始めまして、最後は文化を活性化させると。そういうことで退職して、その後、飛行場のエアターミナルの社長をしまして、大学の学長も経験して今になると。どういうことかというと、北九州市の人口が減り続ける中で、どうやって人口を戻すか、産業を変えていくかということを50年間やってきたということだけ思っていただければと思います。これで自己紹介は終わりでございます。

次のページに移っていただきまして、北九州市はどんな町かというと、実は、1870年の明治維新の２年後に、鉱山解放令という、炭鉱を誰が掘ってもいいよという法律の規制緩

和がされ、その結果、筑豊炭田、ここをいろいろな方が掘れるようになったのです。すぐには掘れませんで、実は、筑豊炭田というのは高度なのです。遠賀川の高度が低いので掘っても水が出てしまう。そのため、産業革命が起こり、水を排出する排出ポンプが出来上がって初めて筑豊炭田が力をつける。それまでは、諫早であったり向こうだったり、ほとんど長崎県とかで掘っておられたのですけれども、蒸気機関により排水ポンプができて北九州がどんと注目されるのです。それは石炭なのです。そういうのがありまして、その石炭の後にいろいろなものが来るわけです。

次で紹介しますが、そういうことで人が集まってきた中で、資料にありますが宗像から出光さんが来られまして、ここで出光商会というのをやって油を売っていく、そういうことを始められた。

それから、鮎川義介さん、この方は日産の元となります戸畑鋳物という会社を戸畑で興されました。また、資料の上段右側にありますようなアーケード商店街も日本で初めにできました。スーパーマーケットも、吉田氏が丸和という、24時間営業のスーパーマーケットを生み出して中内功さんも見に来られました。

それから、高齢者の中で、人手不足の中でどうやっていくか、先進的介護のモデル、こういうようなことをやって、これまで、スタートアップとは言われませんけれども、イノベーションに対してものすごくいろいろな方が活躍した町だというのが根底にありますというのが１点目です。

次は、先ほど申し上げました北九州の歴史なのですが、1901年に、官営八幡製鐵所ができます。これは３つ条件がありまして、筑豊炭田があったこと、それから２番目に、中国大陸に非常に近かったこと。中国の鞍山の鉄がこちらに輸入できたということがあります。それから、もう一つは、地震がほとんどなかったこと。この３つで、1901年に官営八幡製鐵所ができて、人口２万8,000人だった町がすぐに30万人になります。それが大正時代なのですが、資料横に、1915年、安川電機とありますけれども、安川電機製作所が出来上がります。これは、製鉄所を支える、また、炭鉱を支えるモーターを使ったいろいろなものを作っていく。

1917年にはTOTO、東洋陶器さんがこちらに出てくる。これも、販売路として中国が近かったとか、材料となる陶土が出たということがあります。そういうことで、ものづくりの町として発展していきます。

戦争が始まるときには人口は75万まで増えます。ところが、1945年に戦争が終わった後には25万人も人口が減って50万人になるのですが、それから、また、朝鮮戦争の特需を経て、高度成長をやってすぐ100万人になります。これは、大量生産、大量消費を支えたという町で、ずっと製造業で町が元気だったのです。ところが、突然、1974年のオイルショック、1985年のプラザ合意、これでがたんと落ちて、北九州はいろいろな課題がいっぱい出てきます。最初の課題が公害克服、これは1970年代にやられます。その次は、次の産業をどうするか、そういうことを一生懸命やってきた、そこにイノベーションの芽があったと

いうことでございます。

今言いましたように、プラザ合意で「鉄冷え」と言われ、こてんぱんにやられた企業が水平分業で中国に出ていく、ベトナムに出ていく、これにより人口が毎年何万人も減るような時代が続きまして、最盛時106万8000人いた人口が、現在、91万人を切るぐらいまでになってきました。16万人減っております。

そこでいろいろな問題が出ています。まずは人口減少の中、これで投資が少なくなってきます。

２つ目は、製造業でずっとやってきたおかげで、三次産業をどうやって育てていいかというノウハウがなかった。

また、基幹産業であった鉄とかそういうものが成長力をなくしましたので、次に何をしていいか、なかなかそういうことがない。その中で、産業の新陳代謝が進まずに人口流出が続いていた。これが、その資料の左側にある負のスパイラルを作っていきました。

そして資料の真ん中にあります課題が出てきたのです。少子高齢化でどうやって頑張るか。そういった中で、今日おいでのようなスタートアップの人たちに課題解決をしていただいて、新たな産業を創出しましょうと。そのことによって、次の人たちが働きたいなと思えるような産業を興して正のスパイラルに変えていく、こういうところでスタートアップに活躍いただきたいと、こういうことをずっと考えてきたと。

先ほど申し上げましたとおり、イノベーションということについては、コミットするのは非常にいい年でしたので、2020年、スタートアップ・エコシステム、これを募集されたときにぱっと手を挙げまして、スタートアップ・エコシステム推進拠点都市に選定されることになります。それをもって、例えば、スタートアップが実際に集まる場所であったり、伴走するやり方であったり、いろいろなことについて、この制度を使いながらやっていきます。

特に、北九州でよかったのは２つありまして、１つは大企業が多かった町です。日本製鉄があったり住友金属があったり三菱化学があったり、その中の技術というのは、外に出さずに全部我が社のために使ってください。丈夫で長持ち、壊れない製品を我が社に届けてくださいということでやってきた町だったのが、そのたががぱっと外れて、自社が持っている技術を外で使ってもいいよとなったというのが、一つ、背景としてあります。

もう一つは、先ほど申し上げましたとおり、最初の高度成長時期には、現在の団塊の世代、この人たちがお子様でこの町にいたので、大体１学年２万2000人が同級生でいたのです。私は団塊の世代より後なのですけれども、１万6000人の同級生がいます。今年、大学を卒業した人は7,000人を切るぐらいです。ということは、２万2000人の年寄りを7,000人が支えているという町でずっとやってこなくてはいけない、普通どおりやってもなかなかできない。そういう課題を解決するのを、スタートアップの皆さん、お願いしますねということは、ニーズがあったということです。

そういうニーズを解決してくださいということで、このスタートアップの仕組みにエン

トリーした後は、スタートアップ・エコシステムを作るため、いろいろな場所を提供しましょう、伴走のやり方をやりましょう。今日お見えになっているいろいろな方の協力を得ながら、その人たちが、この町に来てスタートアップをやっていく環境を作っていったということです。

これは、大手の企業にお願いして、マーケットの最初のスタートアップの方々が実験する、そういうところの場所も提供するということをずっとやってきております。これにより、実は、新興・スタートアップの出現率が高いというのは、小倉北区、小倉南区、これが全国１番というのが2023年の調査で出ております。第４に八幡西区が出ている。そういうことでございます。

主にどんなことをやっているかというと、産学連携によるスタートアップの支援を全部やっておりますけれども、大学発によるスタートアップ、これに対してどういう支援をしているか。また、スタートアップの成長に対して伴走型でどうやってやるか。まずは、資料中段右側です。「課題快傑バスターズ」というのを出しまして、これはならず者をやっつけるとかそういう意味ですけれども、要するに、北九州にある課題を悪者だと。こいつらを取り除くんだというようなことの制度をやりまして、エントリーをしていただいて、いろいろな課題を解決する、こういうことを公募してやっていく。

あとは、トライアル発注制度といいまして、スタートアップのサービス、製品を認定して、意図的に随意契約をして使っていく。そういう形でいろいろな支援をしているという状況でございます。

最後になりますが、主な有名どころを紹介させていただきますと、クアンドという会社があります。これはJ-Startupに選定されましたが、製造業などで現場向けのビデオ通話のアプリをやっている「SynQ Remote」というのを開発されて、実際、地元の安川電機をはじめ多くの企業が採用しております。

資料右がKiQ Robotics。これは九州工業大学発のJ-Startup KYUSHUに選定されたものでございます。産業用ロボットの自動化という形で事業を行っております。

真ん中のハインツテックさんは、北九州学術研究都市にあります早稲田大学発。後ほど、これは青木社長が御説明されるでしょうから割愛させていただきます。

その横のTriOrb、これは、九州工業大学発なのですけれども、全方向に自由に動ける搬送用ロボットです。

最後に、今日、開会式をやっております万博でも使われております、EVモーターズ・ジャパンが作りました商用バス。電気バスでございますけれども、こういうところが主立ったところで出てくると。

以上、こういう形でどんどん成長していることを紹介して、私からの説明を終わりたいと思います。

〇増田座長　どうもありがとうございました。

それでは続きまして、COMPASS小倉事務局長、福岡様、どうぞよろしくお願いいたし

ます。

○福岡氏　COMPASS小倉事務局長をさせていただいております福岡と申します。私から説明させていただきます。

簡単に私の自己紹介を差し上げますと、1988年に北九州市の八幡西区で生まれました。その後、福岡県の大学を出て、現在はスタートアップの支援をさせていただいているのですけれども、新卒では、北九州に本店をおき、産業プラントの建設及びメンテナンスをてがける高田工業所という会社に入社しまして、日本全国の産業プラントの建設やメンテナンスに、バックオフィス及び営業の部隊として働いておりました。７年ほど前に、私の兄が、この北九州小倉で、行政のDXを主業とするベンチャー企業をすでに興しており、北九州から東京に進出してきておりました。当時、私が東京にいまして、そのときに、一緒に地元北九州から日本に貢献するベンチャーを立ち上げて一緒にやっていかないかという話をうけました。時を同じくして北九州市が2018年にCOMPASS小倉を設置し、市内から全国及び海外に飛び立つ、スタートアップを創出する取組を始めまして、私はその時から関わらせていただいております。

資料の表紙に書いているように、我々、COMPASS小倉は、日本一起業家に優しい場所になろうという思いの下にこの施設を設置しました。

当施設のビジョンは「『日本一起業家にやさしいまち』をつくりビジネスによるSDGs未来都市を実現する」とし、この名の下に、我々は、日々、起業家の方々と向き合い、また、ほかの支援者の方々とのコミュニケーションによりスタートアップを支援させていただいております。

COMPASS小倉は、もともとある施設をリニューアルして、北九州市におけるスタートアップ支援の中核支援施設として歩みを始めました。先ほどの片山副市長の説明もありましたが、北九州のスタートアップ事情を数字でまとめておりますので、改めてキャッチアップしていただけたらと思います。

新興・スタートアップの出現率が全国で１位となりました。これは、帝国データバンク社が出したデータに基づくものなのですが、まさにここ数年において、北九州市と我々が官民一体となってやってきた成果がここに現れているかなと思っております。

また現在、市内で事業を開発するスタートアップが、101社集積しております。北九州で生まれたスタートアップもいれば、ほかの土地で生まれ、この北九州に拠点を構えてくれているスタートアップもここにはあります。そして、市内のスタートアップにおける調達額が、約126億円となっております。

北九州市におけるスタートアップ・エコシステムの第一歩は、約10年前にさかのぼり、2013年にFabit summitといった１つのイベントから、始まっています。

皆さんも御存じかと思いますが、ソフトバンクグループの孫正義さんの弟さんに当たる孫泰蔵さんなどもこのイベントには参加されて、そのときに、イノベーションという言葉が、はじめて北九州に移植されてきたのではないかなと捉えております。

その後、起業家が集うようなコワーキングスペースが市内にでき、また、市の尽力もあり、北九州市は国家戦略特区に指定されます。これが後に、北九州におけるスタートアップ支援が円滑に進むための大きなきっかけとなりました。

そして、2018年、私も現在関与するCOMPASS小倉が誕生し、スタートアップ支援の拍車がかかってきました。

加えて2020年、北九州市は、内閣府のスタートアップ・エコシステム推進拠点都市に選ばれ、国家が認めるスタートアップ・エコシステム都市となりました。

その後、認定ベンチャーキャピタルの制度をスタートさせたり、育ってきたスタートアップの成果だったりというものを対外的に発信するような大型のイベントをすることで現在に至っております。

そのような中、我々COMPASS小倉としては、リニューアルからの７年間で4,200回の創業者の相談を対応させていただきました。月50件ぐらいの相談を日々、私やインキュベーションマネージャーの者が対応しており、関わった創業の件数は129社となっております。また、COMPASS小倉に居を構えるスタートアップは現状21社になり、累計の調達額は約125億円となっています。

また、既に事業活動を推進しているスタートアップだけではなくて、未来のスタートアップ人材、イノベーション人材を創出していくために、市内の大学等と連携してアントレプレナーシップ教育、いわゆる起業家マインドを醸成していくための教育も一緒にさせていただいております。

こちらは、COMPASS小倉に居を構えてくださっているスタートアップ企業のロゴになります。黄色の枠がロゴの周りについているスタートアップは、まさにこのCOMPASS小倉に本店を構えて、おおよその企業がCOMPASS小倉から始まった企業になっております。

ここからが少し具体的な支援の話になってまいります。

創業に関わる支援として、インキュベーションマネージャーによる創業相談と特定創業支援の二つがございます。我々は日々起業家の方々と対峙して、どういった事業アイデアを社会に実装していくかというところに対し、いわゆるFACE TO FACEでコミュニケーションを取らせていただいております。まさに先ほど申し上げた国家戦略特区に基づいてできているのですが、我々のハンズオンの支援を受けることにより、法人登記の登録免許税が半減なるなどの制度を導入することができております。

また、行政書士に、法人を設立する際の行政手続、これらを無料でハンズオンサポートしていただけるような制度もあります。

加えて、資料右手になりますが、雇用における相談を弁護士や社会保険労務士の先生に無料で相談できる制度があります。これも国家戦略特区に基づいて、我々の、COMPASS小倉としてのサービスとして提供できるような状況にあります。

それらに加えて、起業家に向けたセミナーやスタートアップを短期間において成長支援するアクセラレーションプログラムを提供しております。アクセラレーションプログラム

の対象はスタートアップの用語で言うとプレシードとかシードに特化して支援をさせていただいております。

また近年ではグローバルを意識し始めたスタートアップも増えてきております。

先ほどの片山副市長からの説明にもありましたが、北九州市には、もともと安川電機、TOTOといったグローバルカンパニーがいます。彼らに追いつけ追い越せではないですけれども、やはり視座高く、グローバルで活躍していこうとしているスタートアップが、本日同席されているハインツテックの青木さんを含め複数いまして、彼らがいかにこのグローバルに羽ばたいていくかということに向けたサービスメニューも提供させていただいております。

また、同じく本日の同席者である9Capitalの竹山さんをはじめ、スタートアップに投資をするベンチャーキャピタルを北九州市が認定する制度があります。認定したベンチャーキャピタルと一緒になって市内にいるスタートアップに対して補助金の付与にとどまることなく様々な支援を行っています。

そして、既存のスタートアップ支援にとどまらず未来の日本を支える人材を、この北九州市から生み出していくために学生向けのアントレプレナーシップ教育も行っています。、また令和７年度は市内にある十数の大学の中で埋もれているイノベーション人材を結集したスクールなども提供する企画を進めております。

私からの説明は以上となります。ありがとうございました。

○増田座長　どうもありがとうございました。

続きまして、九州工業大学副理事であります米澤様、どうぞよろしくお願いいたします。

○米澤氏　皆様、はじめまして。九州工業大学の米澤と申します。今日はこのような機会をいただきまして、本当にありがとうございます。

今日、私は、九州工業大学の進めるイノベーション創出大学モデルについて御紹介させていただければなと思います。

資料を１枚めくっていただきまして、まず、九州工業大学はどういう大学かということですが、我々、ビジョンとしては「未来を思考する『モノづくり』と『ひとづくり』を推し進め、最先端の技術と人材で世界にインパクトを与えるイノベーション創出大学になる」ということです。実は、九州工業大学は、安川電機を設立された安川敬一郎先生の私財で立ち上がった、もともと私立の大学がそのまま国立になるという珍しい歴史を持った大学で、まさにアントレプレナーが設立した大学というところになります。

実は私、今、副理事という立場をいただいていますが、私はまだ30代でして、国立大学で30代の副理事はなかなか珍しいところで、九州工学の経営層のマインドも、まさにアントレプレナーシップ、起業家精神を持ったような、そういった執行部が大学の経営をしているところだということをまず覚えていただけると大変うれしいなと思います。

では、九州工業大学はどういう特徴があるかというところで、次のページになりますが、なかなか知られていないのですけれども、実は超小型人工衛星で、世界の学術機関で打ち

上げ数が８年連続１位になるぐらいの、実は超小型人工衛星開発の一大拠点になっております。

また、水中ロボットの世界大会で２位になるとか、生活支援ロボットの世界大会でも６度優勝するような、実はロボットの開発技術もかなり高い大学で、先ほど御紹介のありましたTriOrb、全方向に移動できるようなそういった移動台車というのも九州工業大から生まれたスタートアップになって、世界で活躍しようとしているところになります。

また、通信技術も九州工業大学はかなり研究が活発でして、特に、水中とか超小型人工衛星も強いので、宇宙のような、極限の環境での通信技術というところに強みを持った大学です。特に、通信技術系を世の中で本当に活用しようとすると、法規制緩和、ルールもちゃんと変えていかないといけないところがあって、ここは北九州市さんの国家戦略特区を積極的に活用させていただきながら、法整備もしっかり貢献しながら、技術を社会で使えるようにする、そういった活動をさせていただいております。

大変ありがたいことに、九州工業大学は、J-PEAKSの１つの大学、25大学の一つとして、この日本国の科学技術を牽引させていただく立場ということで認定いただくことができました。これから５年間かけて、ますます我々の研究力を、日本国、そして、世界に貢献できる形で発展させていくということの活動をこれからしてまいります。

ここまでお話ししまして、では、お前は何者なのだというところを少し御紹介させていただきたいと思います。

私自身は博士号、理学を持っていまして、理学博士を取って、そのまま今の研究マネジメントの仕事に転身しまして、今、九州工業大学で８年目になっております。私自身はメインの仕事を２つ今持っておりまして、１つが本当に研究者の伴走支援。まさに、大学の研究者というのは、学術研究から、また、社会実装につながるところまで本当に様々なプロジェクトを研究室の中でやっておりまして、イノベーションの種が研究室で常に生まれているわけですが、まさにそこに入り込んで、それをどう世の中に広げていくか、どう発展させるか、そういったところの伴走支援をさせていただいております。

もう一つの役割が、冒頭でお話ししましたとおり副理事という役割で、今度は大学の経営側の立場でいろいろな取組をさせていただいておりまして、大きく３つの立場をいただいております。

１つ目が社会実装本部担当ということで、大学から出てきたイノベーションの種を本当にどう社会実装につなげていくのかというところを、先ほど御紹介しましたJ-PEAKS事業や、そして、また後で紹介しますPARKSプラットフォーム、九州・沖縄20大学と一緒に形成しているスタートアップ・エコシステムの運営等を通じて、どう社会実装していくかという役割を一つ担っております。

２つ目が、この大学の経営自体をどうするかという経営戦略室担当の形で、大学の中では研究室単位で本当に面白いプロジェクトが動いていますし、本当に様々なプロジェクトが動いている、それをどう全体を連動させて、一つのプログラムとしてしっかり社会に貢

献できる形に持っていくか、そういったところの取組をさせていただいております。

また、３つ目の役割が、若手工学アカデミーということで、実は九州工業大学は、40歳未満の全職員が、この若手工学アカデミーというところに所属することになっておりまして、まさにこの若手がしっかり大学経営に関わる、この若手工学アカデミーの意見を私が集約して、それをまた経営層につなげていく、そういった役割、この３つを副理事という立場で進めさせていただいております。

今日、少し皆さんに話題提供をさせていただきたいのは、九州工業大学自体の課題でもありますし、多分多くの地方が持っている課題ではないかなと思うのですけれども、大学としては人材育成、高度人材育成というのがミッションですが、大変残念ながら、育成した高度人材が関東や関西に出てしまっているという実情がございます。

では、九州工学の学生はどこから入学していますかといいますと福岡県内が大体50％。九州を合わせると約80％の学生が九州工業大学に入ってきてくださっているわけですが、そこで学んで育成された､ディープテックも知った高度人材がどこに就職するかというと、基本的に５割は関東のほうに行ってしまいます。言い方を変えると、九州域内に残るのは20％程度ということで、せっかく地域で育成したディープテックを知った高度人材というのが地域に残っていないといった実情がございます。

次のページですが、これは何が課題か。我々は研究室にも入り込んで、いろいろな学生様とコミュニケーションもとっておりますが、やはり一番の課題は、そういった高度人材が活躍できる場所がなかなか地方にないと。関東、関西のほうにそういった場所があるということで、やはりそこに出ていってしまうということが実情でございます。そういう意味で、我々九州工業大学が今掲げているのは、我々大学が、しっかりそういった方々が活躍できる場所の創出、言い方を変えるとスタートアップになってくると思いますが、そういった場所を地域にしっかり創出するところまで貢献していこう、それが九州工業大学のイノベーション創出大学モデルになっております。

もう言わずもがな、大学というのは高度人材、そして、技術というのを創出している場所でございます。それだけではなく、スタートアップを創出するとか、しっかり地域の企業に技術移転を進めるなどして、高度人材が活躍できる場所までしっかり創出することに貢献すると。そうした中で、地域の特色、インフラ、強みをさらに伸ばすエコシステムの形成に貢献するだったり、また、高度人材の循環システム等を作らせていただき、高度人材の、地域に定着できるような仕組み、そういったところにも貢献していければなと考えております。

では、具体的にどういうことを今からしようとしているか、これはまさにJ-PEAKSで進めるところになりますが、まず忘れてはいけないのは、大学というのは学術研究機関であると。学術研究とは何かというと、社会を変えることができる、誰もが見つけられなかった新しい発見、アイデアというものを、ただの夢物語ではなくて、しっかり客観的エビデンスを基に世の中に示す。それは論文として発表するということですけれども、まさにそ

れをやっていくのが仕事なのですが、残念ながら、そういった夢物語ではないが論文レベルの提案を企業の方にお渡ししたところで、これでビジネスをしてくださいと言われても、なかなかビジネスまでは持っていけないと。でも、大学としては、その学術研究が主ではありますので、なかなか大学ではそこまでしか今まで関われなかったと。まさに、ここにギャップがあって、大学から幾らいいアイデアが出ても、アイデアで止まってしまって、人類の知識レベルは上がるのですけれども、残念ながらそこで止まってしまっていると。

では、九州工業大学は、工業系大学として何をしたいかというと、８ページ目の黄色いところになりますけれども、我々は新しく「未来思考実証センター」というものを今回設立して、また、このJ-PEAKS事業で強化していきます。

ここは何をするのかというのが９ページ目の資料になるのですが、簡単に言ってしまうと、すばらしい世界を変えるかもしれないアイデアを、アイデアで終えるのではなくて、そのアイデアでどんなビジネスができるか、どのように使えるのか、そして、それを使うための法整備までしっかり貢献することで、まさにそれを使って、社会を変えたい、社会でビジネスをしたいと思う方々に提供できるようなパッケージングまでをしっかり大学としてやっていこう、それを行える実務者、学者は、本当に学術研究をするのが仕事なので、そうではなくて、それを、先ほど申したようなビジネスとして使えるようなパッケージング化をするような実務者を集めて、しっかり社会に展開してこうと。これは、九州工業大学だけの技術ではなく、本当に日本国から生まれた、ありとあらゆるそういったアイデアというものを、しっかりそういったパッケージング化していくような、そこに貢献していきたいなと考えております。

最後のページになりますが、こういった九州工業大学の歴史、また、ものづくり等に強いというそういった強みを生かして、そういった技術開発、パッケージング化ということもやっていくのでが、同時に、今、まさに北九州市様がスタートアップ拠点都市に選ばれている、そこのきっかけで設立されましたPARKS、スタートアップ・エコシステムですね。山口県から沖縄県までの20大学が参加してやっている大学発スタートアップ・エコシステムなりますが、まさにここの共同主幹校として、このPARKSによる創業支援、そして、未来思考実証センターによる技術開発、この両輪をうまく回すことで、大学から出てきた世界を変えるようなアイデアを、しっかり今度は、本当に社会を変える形に持っていく、そういった取組を、大学として責任を持ってこれから仕掛けていきたいと思っています。

私のほうから九工大の取組は以上になります。引き続きよろしくお願いします。

○増田座長　どうもありがとうございました。

続きまして、ハインツテック株式会社代表取締役、青木様、どうぞよろしくお願いします。

○青木氏　皆様、どうぞよろしくお願いいたします。ハインツテックの青木と申します。

本日、私からは、皆様方から今御説明がいろいろありましたけれども、そういった北九州市の中で活動を行っている一スタートアップからの目線として皆様に問題提起させてい

ただければなということでお時間をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、中身に入る前に、私自身の自己紹介を簡単にさせていただければと思います。

私は、大学院のほうでナノテクとバイオロジーを勉強しておりまして、その際に、私自身がよく感じていたこととしては、大学の研究というのは、どうしても学会で発表しよう、論文にしようというところを目標にして日々一生懸命走るわけなのです。けれどもそこでどうしても思考が途切れてしまいます。私、大学院にいたときに、同じような研究テーマをやっていたアメリカのスタートアップがいたのですけれども、彼らがある日突然日本にやってきて、「君らの技術、僕らが売りたいから売ってくれ」と言われたのです。それにものすごく私はびっくりしてしまって、自分たちは今まで、論文にしたいとか発表したいとか、そういう動機で走ってきたわけなのですけれども、これが何とお金を払ってまで欲しい人が世の中にいるのかということで、そこで初めて社会と大学での研究とのつながりというのを意識した瞬間になりました。

というわけで、私は、その後、アカデミアの道に進もうと思っていたのですが、それをやめてビジネス側に転向しまして、アメリカの半導体企業のインテルとか、あとは、同じくアメリカのソフトウエア会社のVMwareといったような会社で、新規の事業開発とか市場開発、または新規事業開発時のパートナーさんとのアライアンスとか、そういったような活動をずっとしてきたような立場でございます。

そういったことをしている中で、今回御紹介させていただきます技術の開発者でございます大学の先生から、これを事業化したいのだがどうやってやったらいいのだろうという、もともと出身の研究室の先輩だったわけですけれども、そういった相談をいただきまして、どうも話を聞くとめちゃくちゃ中身が面白いと。技術的にも面白いですし、これがビジネス的にも非常に社会インパクトが大きくて面白いものだというのが分かりまして、では、私がやるということで、脱サラして起業して今に至るわけでございます。

そういったハインツテックという会社を行っておりますが、何をやっているかと言いますと、もともと根っこの技術としては、半導体のプロセスのような微細加工技術でございます。半導体プロセスを活用した微細加工によって、物すごく小さな微細な針がたくさん並んだような構造、これは、左側の絵の、右のほうに電子顕微鏡写真が出ていますが、こういったような非常に微細な針が、これは、径が数百ナノから数マイクロぐらいでございますけれども、そういったナノスケール、マイクロスケールの針が並んだような構造を作りまして、こちらを細胞に刺して、細胞に直接物質、外から物質を導入したり、細胞の中身を採ってくるといったようなことをする技術を、皆様方に提供するスタートアップをしております。

なので、入り口は半導体、出口はバイオテックということで非常にディープテックなところではございますが、先ほどから御説明がちらほら出ておりますが、北九州学術研究都市という場所がございまして、ここに九工大さんや、皆さん、本当に知らないのですけれ

ども、実は早稲田大学の大学院の一研究科だけが入っておりまして、いろいろな大学と、あとは企業が集積したようなエリアがありますが、そこの早稲田大学から始まったスタートアップでございます。

そういったスタートアップを取り巻く環境ということで次のページを御説明させていただきますが、実は、都市部と比較したときに、地方のほうがディープテック系のスタートアップを創出しやすいというのが、昨今言われ始めております。

何故かといいますと、ラボスペースが潤沢にあるというのがまず一番大きいです。我々、非常に多くの装置を扱いますし、実際に、半導体側もそうですし、この細胞を触る側もそうなのですけれども、装置もたくさんある、人が来たら新しい装置をその分入れなくてはいけないとか、そういったようなことを考えると、ラボスペースの問題というのは非常に死活問題です。私が共同研究している東京の大学の先生の研究室に行ったりすると、物すごく狭いスペースで学生さんがひしめき合いながら頑張って研究をされているわけです。なので、地方において、単価が安いスペースを確保しやすいというのは非常に重要なポイントです。それと同時に、静かな環境が周りにありますので、非常にこれが研究開発活動に集中できるということがあります。

また、「行政、人、企業、大学との連携がしやすい距離感」というのがありますけれども、こちらは、特に北九州に来て、ものすごくここが強いなと感じているところでございます。ほかの地方都市においても、都心に行って、たくさんのプレーヤーがいるところで活動することに比べますと、恐らく地方のほうがそういった距離感が近く、いろいろなサポートなども受けやすいのかなと感じております。

そして、何より、今日一番申し上げたいのは、潜在的な労働力が物すごくたくさんあるということです。

特に北九州の話を少しさせていただきますと、製造業に強みがあるということもあって、そういった知識、経験が豊富な方々がたくさんいらっしゃるということもそうですし、もしかしたら、これは九州地方で特にそれが特化しているのかもしれないとやや思ったりする場面もありますけれども、女性があまり働いていないのです。結構能力のある女性がたくさんいらっしゃるのですけれども、扶養の範囲内で働きたいとか、そういう方が非常に多くございまして、そういった観点からすると、まだまだ働ける力というのは地方にたくさんあるのに、それが活用されていない状態かなというのが思うところでございます。

地方創業に関してはデメリットもございまして、いろいろ情報とか資金、人材へのアクセスが限定的等はありますが、今、コロナ禍を経て、我々、ウェブ会議を普通に使っているという世の中になったので、ここの部分は、強み、弱みを分かっていながら経営をしていくということが非常に重要なのかなと思います。

その中で、北九州市は、特に学研都市がある、そして、先ほど申し上げたように製造業の方がたくさんいらっしゃる。そして、コンパス小倉のような起業家とサポーターの距離が非常に近いような場所、ハブとしても御提供いただいているということで、地方都市の

中でも、特にディープテック系のスタートアップを創業しやすい場所であるのかなということを考えております。

私は、一大学発ディープテック系起業家でございますが、その私の観点から見た起業家の課題と、そして、こんな支援があったらうれしいなというものを案として出させていただきました。

一番左の課題のところを見ていただいて分かるとおり、起業前から起業後に至るまで、一つの方向性だけではなくていろいろな角度から問題がどんどんどんどん山のように降ってくるというのが起業家でございます。ですので、それらを全て解決できる人などどこにもいないので、こういった、いろいろな方面からの多角的な支援ができるような、そういう体制を作っていくということが非常に重要だと思いますし、特に、人のところですね。先ほど米澤さんのお話にもありましたけれども、人を創出していく。そして、これが都市部にどんどんどんどん出ていってしまうのではなくて、Ｉ・Ｕターンの支援を行うとか、また、戻ってきていただくようなＩ・Ｕターン支援を行っていくといったような、人材流動を促すような施策というのは非常に大事なのではないかなと考える次第でございます。

最後のページでございます。

このような取組を北九州の中でも、もちろんこちらにいらっしゃる皆様方の支援を受けて、非常に高いレベルのものが、今あるだろうなと私自身も感じているところではございますが、これを北九州市内だけで終わらせずに、日本全体がより国力を高めていくために、全国に広げていくにはどうしたらいいだろうということを考えると、先ほど副大臣の話にもちらっと出ましたが、中央だけで終わらせるのではなくて、地方を核にしていく必要があるのかなと。地方で実際に起きている課題感とか、実際にそれをどうやって解決していったのかというところをぜひ拾っていただいて、そして、起業家の観点からすると、先ほど申し上げたように全方位的に支援を行っていただくようなモデル構築をしていただけるととてもいいのかなと考えております。

各自治体レベルで強みの探索をしていただいて、これは北九州で言うと製造業が多いというようなことになろうかと思います。そして、スタートアップ創出のためのハブ機能の設置や明確化、これは北九州で言うとコンパスとか学研都市ということになろうかと思いますが、そういったことをしながら、実際に、都心といいますか中央といたしましては、地方起点での政策設計をぜひしていただければと思っておりますし、起業をするためのアントレプレナーシップ教育とか、その醸成というところで終わってしまうのではなくて、その先の企業化した後も連続して成長し続けられるような、連続した、かつ、具体的な支援をぜひ取り入れていただければなと思います。

先ほど扶養の範囲内みたいなお話もさせていただきましたが、これらが、雇用、税制、教育など、非常に様々な観点から御支援が必要かなと考えておりますので、ぜひ、今日は、そういった議論ができればと考えております。どうもありがとうございます。

〇増田座長　ありがとうございました。

続きまして、9Capital合同会社代表の竹山様、どうぞよろしくお願いします。

○竹山氏　よろしくお願いします。貴重な機会をありがとうございます。

去年の８月に9Capitalというベンチャーキャピタルを立ち上げまして、１号ファンドを11月にローンチしてございます。今年の１月からは、起業家を育成するアクセラレーションプログラムを開始しています。もともとはソフトバンクでエンジニアからキャリアをスタートしまして、テクノロジーの知見を生かして社会課題を解決する事業を創出する経験をして、その後に産業革新機構に移りまして、IT/IoT/ディープテック領域を中心に新産業を作るための投資活動をしてきました。

日本に強みのある既存産業と新産業であるスタートアップ、この融合こそが日本に新産業を生み出すような源泉になるのではないかなと思って、前職はレオス・キャピタルという金融機関でものづくりに特化したファンドを立ち上げて、そこから北九州に御縁をいただいて、３年ぐらいアドバイザーをやらせていただく中で、北九州に仲間もできたので、では、北九州でファンドをやろうかということで9Capitalを立ち上げたという次第です。

地域であれば、特に、日本に強みのある既存産業が集積していて、豪族企業屋大企業、九州工業大学のようなアカデミア、自治体が、顔が見える関係性の中でコミュニティを形成して、我々は金融としての機能として、コミュニティの一部として、連続的にスタートアップを生み出して育成する枠組みができるのではないかなと思って9Capitalをやっています。

北九州において面白いと思うところで言うと、やはりものづくりかなと思います。

鉄、金属、樹脂、半導体の材料が全てそろっていて、組み上げができるエコシステムがあるというのは、日本でもほとんどないですし世界でもほとんどないと。これは、ちょっと言い過ぎかもしれないですけれども、ベースは深圳と似ているなというところで、世界の工場だった深圳にテンセント、BYD、DJIといった、ソフトとハードのスタートアップが混じり合って今の深圳があるという意味では、北九州にはそのポテンシャルがあるのだろうなと思っています。

時間の関係で細かい説明は割愛するのですけれども、チームの中でVC経験があるのは自分だけ。ほかのメンバーは、連続起業家だったり、あるいはエンジニアでチームを組んでいます。

一例を申しますと、学生起業から５回連続起業して５回事業を売却しているような事業を作る天才のようなメンバーでしたり、ランサーズというフリーランスのエンジニアやデザイナーと企業をマッチングするプラットフォーム企業のCTOを経験したようなメンバーがコアチームとして入ってくれています。

こういうメンバーを軸に投資活動だったりアクセラレーションをやっていくのですけれども、自分たちのケイパビリティはソフトの領域なので、先ほどの北九州の強みであるものづくり既存産業と接続したときに、ディープテックやハードテックが親和性高いであろうことから、アクセラレーションのチーム組成というのは、ものづくりの領域にケイパビ

リティを持った方々にも入っていただいています。

これも一例で申しますと、ソニーでロボットのペットのaiboのリードエンジニアをやって、いわゆるハードウエアのスタートアップが直面する量産設計だったり量産の壁を突破したことがあって、そういうコンサルができるメンバーでしたり、早稲田大学発ヒューマノイドロボットスタートアップの研究者兼技術者兼ファウンダーがいるなど、ディープテックのスタートアップ、あるいは、スタートアップしたい人にも、コンサルとか壁打ちができるようなメンバーでチームを組んでいます。

とはいえ我々、私は二拠点生活ですけれども、基本、首都圏のメンバーという中で出張ベースになって北九州で起業家を育成する取り組みをしていますが、５年先、10年先は、地元の方々だけで起業家を生み出し育てていく、それを文化にしていきたいなと思っています。そこで、地元の方々にも協力いただいています。ここにいる福岡さんもそうですし、これまでずっとスタートアップ支援をやっている個人の方もそう。それから、自治体の方もそう。それから、地元企業さんからも、金も人も場所も出すということで支援をしてくださっています。

そのような支援をしてくださるのはどんな会社かと申しますと、岡野バルブさんです。

小倉から１駅行ったところに門司という駅があるのですけれども、門司の駅前に本社があって、原子力発電所のバルブの世界シェアナンバーワンのニッチトップの会社さんです。

本社の裏側に、真ん中の写真にあるような工場がありまして、バルブを作っていた工場です。これは東京ドーム１個分ぐらいあって、現在は工場の機能が行橋という場所にあるので、ここはガラ空きですと。ここにスタートアップのプロダクトを使ってもらう、実験をする場所として開放してくれているという形です。

何かというと、ドローンを飛ばしたり、自動運転のプロダクトを動かしたり、あるいはFA機器の実験をしたりロケットの燃焼実験をするみたいなことで、無償で貸し出してくれています。これはディープテックとかハードテックのスタートアップからしたら宝物みたいな場所なので、ここを使うためだけに全国からスタートアップに来ていただいています。

あと、インキュベーション施設みたいなものも貸し出していただいていて、ここに、先ほどのコーチ陣とか、九州全域の起業家候補、学生起業家候補、起業家、あるいは瀬戸内の辺り、東京からも来ていただいています。

起業家や起業家候補が全部で35組エントリーをしてくれて、アクセラレーションを始めてから３か月たったところです。どんなスタートアップが来ているかというと、ステージとしては、創業前から、創業して間もない段階のスタートアップがほとんど。プラス１社だけ再来年上場する会社も来ていただいていて、このまま行ったら100億から200億円のレンジで上場するという中で、アクセラを通じてもう一つ事業を作って、既存事業とのシナジーでユニコーンになれるぞということで、ユニコーンアクセラということで来ていただいています。

そこのリターンは何かというと刺激かなと思っていまして、九州とか、あるいは瀬戸内

の辺りとかで言うとユニコーン企業というのがなかなかなくて、隣で席を並べてプログラムを受けていて一緒に働いている人が、２年後にユニコーンの起業家・経営者になることは、次に続く起業家の後押し、あるいは刺激につながるというところで、こういう人にも来てもらっています。

領域としては、ものづくり、ディープテックは親和性があるかなとは思うのですけれども、画一的なコミュニティだと、なかなか成長も限定的になるかなというところで、先ほどの深圳みたいなところでいっても、テンセントというエンターテイメントの会社があったりBYDというハードの会社があるみたいなことで言うと、ソフト・ハードあるいは社会起業家、あるいはフィンテックのような多様な起業家が混じり合って、カオスの環境の中で刺激を与えながらみんなで切磋琢磨しているという形です。

北九州の起業家が中心ではあるのですけれども、東京の起業家が意外と多いです。例えば、九州工業大学を卒業すると東京の大企業に就職したり東京で起業するみたいな人が結構いるのですけれども、この東京の起業家の中には、九州工業大学出身の起業家もいらっしゃいます。なので、僕らがアクセラレーションすることで優秀な起業家を呼び戻すみたいなこともやっています。

これまで中間地点の３か月で、起業の教科書に書いてあるようなことを座学で学び続けるというよりは、プロダクトを作りユーザーに使ってもらって、資金調達もするということで、徹底的に実戦のプログラムをやっているので、中間地点でもそれなりに成果が出ています。ピッチイベントみたいなところで優勝したり、国際的なアクセラレーションプログラムでトップ10％の評価を得たり、プロダクトをリリースしているところで言うと、ユーザーがもう既について、いろいろなところから評価を得ているみたいなところで実績が出始めています。

北九州が面白いなと思うところで言うと、先ほど青木さんのプレゼンにもありましたけれども、人の関係とか企業の関係が非常に近いなと。物理的にも精神的にも近いなという中で、先ほど御紹介した岡野バルブは門司区というところの話です。あとは、米澤先生がいらっしゃるのは戸畑区、九工大の話。それから、青木さんから御説明のあった学研都市は若松区です。

これまでに御説明がなかったところで言うと小倉。我々、北九州でのアクセラを通じて年間30社、40社を生み出していくということもしていくのですけれども、あるいは、北九州外から50社、100社連れてくるということをやるのですけれども、なかなかこれでも東京と圧倒的に数の差があると。もちろん歩留まりがあるので数も追っていかないといけないという中で、年間で200社、300社生み出すような枠組みづくりみたいなこともしようと思っています。北九州に来ればプロトタイプも作れるし、実験もできるし、ビジネス実証もできるみたいなところで、全国から、あるいはシリコンバレーからも起業家が来てくれるという状況です。

北九州だけで閉じるみたいなことも全然面白くないなと思っています。北九州で言うと、

瀬戸内海に面しているので瀬戸内のエリアとも言えるという中で、瀬戸内で言うと神戸、大阪、あるいは、岡山、広島のあたりには北九州とは特色の異なるものづくり産業が集積しています。北九州は立地条件として九州全域に行きやすいみたいなことで言うと、福岡、熊本、あるいは鹿児島、宮崎は一次産業が盛んみたいなところで、また違うケイパビリティと面白いコミュニティが存在していて、コミュニティとコミュニティを接続していく、それによって人の交流、情報の交換、あるいは、ここでプロダクトを作り切って東京を目指していくという世界線だけではなくてアジアを目指していくみたいなこともやっていきたいなと思っています。

最後、お願いしたいことも言っていいということなので、ヒト・モノ・カネでお伝えできたらなと思います。

ヒトで言うと、スタートアップで闘える人。これは、起業家はアクセラを通じて育成しているのですけれども、スタートアップのプレーができるスタッフはなかなか生み出せないし、地方にはいない。そこはもう東京が何周もスタートアップエコシステムを周回しているので、スタートアップのスタッフも多数いるという中で、彼らが移住しやすい、そういう補助事業みたいなこととか補助金とか、支援みたいなことはぜひお願いしたいなと思っています。

あと、モノで言うと、先ほどのスライドとちょっと矛盾するようなことを言うのですけれども、北九州の地元企業や機関のうち１割ぐらいの人はイノベーターで新しいことに協力してくれるのですけれども、９割ぐらいは保守的な印象です。例えば、我々で言うと高齢化が進む北九州において、エイジテックのスタートアップを複数サポートしていますが、街のクリニック、訪問ステーション、中核病院、全てと接続すると患者さんにとって最大の価値を出せるプロダクトがあっても、保守的な方がいらっしゃると一部の導入が進まず、結果として課題解決も限定的になってしまいます。政府公認のスタートアップ、あるいは、北九州市公認のスタートアップみたいなお墨付きをいただければ、保守的な方も乗ってくださりやすいのではないかなと思っています。そのように北九州でビジネス実証を行なって、北九州モデルを構築して全国・グローバルへ展開する流れを作るときの公認みたいなことをいただけたらすごくうれしいなと思っています。

あと、カネです。

カネで言うとリスクマネー、これ一択です。我々で言っても、地元の方々からお金をお預かりして、かつ、北九州市も１億円のファンド出資の公募を出していただいているのですけれども、これでも足りないと。アンカーマネーとして３億から５億必要という中で、そういう出し手がいない。金融機関をはじめとするファンド出資者の皆様は実績を重視するので、多くはすでに実績が出ている東京籍ファンドの２号ファンド以降に出資するという世界線の中で、地方１号ファンドにはなかなか皆さん出資していただけないのが現状です。地方創生交付金みたいなところで、北九州市に予算をつけていただいて、北九州市から３億円、５億円出資できるような環境を作っていただけたら、すばらしいエコシステム

ができるかなと思っています。

長くなって失礼しました。以上でございます。

○増田座長　ありがとうございました。

続きまして、最後になりますが、有限会社フクオカ・ナウ代表のニック・サーズ様、どうぞよろしくお願いいたします。

○サーズ氏　こんにちは。カナダ、トロント出身のニック・サーズです。

初めて日本に来たのは1985年で、東京と大阪でサラリーマンとして暮らした後、福岡に移り、それから30年以上、ずっと福岡に住んでいます。

1998年にFukuoka Nowというバイリンガル・メディアカンパニーを立ち上げました。最初は無料の月刊誌としてスタートし、今はウェブ、SNS、動画チャンネルを通じて、地域ニュースやシティ情報、九州の観光関連のコンテンツなどを作り、発信しています。

目的は創業当時からずっと同じで、外国人が福岡での暮らしを理解し、楽しむことです。Fukuoka Nowというメディアやイベントを通じて、多くの外国人たちの活動やビジネスを紹介し、ネットワークにつなぎ、福岡でどうすればやりたいことができるか、情報やヒントをシェアしてきました。

Fukuoka Nowはただのメディアに留まらず、多くの外国人が自分のサービスやアイデアを読者や地域にシェアし、ビジネスを育てる場になりました。これまでに多くの外国人がいろいろなスタートをするのをサポートしました。外国人の支援になり、地域のためになることが、私には一番、今、意味のあることです。これが私なりのスタートアップ支援です。

月刊情報誌は、創刊号から福岡に住む外国人を表紙モデルに起用しました。それは、私たちはここで楽しんでいるというメッセージでもありました。インタビュー記事では、シェフやミュージシャン、先生、起業家など、地域で活動する外国人を紹介しました。その紹介が彼らのキャリアの助けになりました。また、記事作成や写真、イラストなどにもできるだけ外国人クリエーターを採用しました。「By Foreigners For Foreigners - 外国人による外国人のための」は、ただのスローガンではなく私の信念です。

外国人にとって本当に必要な、分かりやすく実用的な情報をタイムリーに発信しています。特に、九州に特化したローカルニュースは、全国ニュースにはならないけれども、九州で生活して働くためには必要な情報です。現在、私たちのウェブサイトには国際人視点でキュレーションした九州のニュースが英語で１万1000本以上掲載されています。もちろん毎日更新しています。

また、飲食店、言語学校、アート活動、サービス業など、多くの外国人経営の小規模ビジネスにとって、Fukuoka Nowは数少ないリーズナブルな広告媒体でした。Fukuoka Nowの読者が彼らのターゲットと一致していたため、広告主にとっても効率のよい媒体でした。Fukuoka Nowは、単に福岡を紹介するメディアではなく、国際的な福岡を一緒につくる存在です。

Fukuoka Nowを始めた頃は、外国人経営者として多くの課題がありました。その一つ一つが学びであり、今ではほかの人にも役立つ経験になったと思います。

ビザ。最初は就労ビザです。毎年更新が必要なので長期計画は立てにくいです。言葉の壁。日常会話はある程度できましたが、読み書き、そして、ビジネスで必要な敬語は今でも難しいです。スタッフや友人に助けてもらって何とかやっています。いろいろな手続は今も大変です。契約、銀行、税金、不動産など、これもバイリンガルのスタッフや友人に助けてもらいましたが、プライベートなことや外国人だから必要なことも多いので、それも難しいです。

資金については、これは日本人も同じかもしれません。融資を受けるのはとても大変なので、シェアオフィスとパートタイムのスタッフ、そして自己資金で小さくスタートしました。

信頼の獲得。日本人が大切にする信頼。国籍に関係なく信頼を得るのは簡単ではありません。相談の相手が少なかったこと。起業当時は英語でビジネスの相談をできる人がほとんどいませんでした。2006年に福岡県と一緒に設立した福岡インターナショナルビジネス協会（FIBA）は、今でも続いている貴重なビジネスコミュニティです。外国人ビジネスパーソンが仲間を見つけたり、日本企業や行政と直接つなげるための場です。

キーパーソンとのアクセス、これは地方ならではのメリットです。福岡では、知事、市長、大手企業の社長と直接会える機会は東京と比べてはるかに多いです。これは起業家にとっては大きなメリットだと思います。

Fukuoka Nowは小さなフリーペーパーでした。時間とともにビジネスを応援したり人とつないだり、地域に役立つコミュニティになりました。こんな読者からの声をよく聞きます。「Fukuoka Nowを見て初めてクライアントができました」「Fukuoka Nowのウェブで福岡を知って引っ越してきました」「ニュースで紹介されていた会社で今働いています」「イベントでパートナーに出会いました」。そして「あなたのような外国人がビジネスを始めているのを見て、自分もできるかもしれないと思いました」。

外国人のスタートアップは、新しいパワーやアイデア、そして、多様な人とのつなぎを生み出します。地域に仕事をつくり、世界とのかけ橋にもなり、地元の人には刺激にもなります。日本の地方で自分の夢をかなえたいと思っている外国人がたくさんいます。それが本当にできるということを私たちが見せていきたいと思います。

以上です。

○増田座長　どうもありがとうございました。

今、６人の発表者の方々から御説明を頂戴しました。これからは、こちら側、有識者委員と、発表された皆さん方との間の意見交換ということにしたいと思いますので、有識者委員のほうから御質問、それから、コメントがある方は挙手をして、そして、オンラインで参加の委員の方は、挙手ボタンでこちらのほうに合図をしていただきましたら、私のほうから指名をさせていただきたいと思います。

コメントはおっしゃっていただければいいのですが、御質問は、６人いらっしゃいますので、どなたに対しての質問か、あるいは、何人か複数の方でも結構ですが、その辺りをおっしゃっていただけますと幸いでございます。それでは、どうぞお願いしたいと思います。

それでは、細川委員からどうぞお願いいたします。

○細川委員　ジャーナリストの細川でございます。

かつて、私、増田座長が岩手県知事時代に『自治体の挑戦』という連載をしておりまして、岩手にもお邪魔したのですが、北九州にも取材に来させていただきました。もう20年以上前になるので、本当に今日のお話をお聞きして、大分、北九州市のイメージががらっと変わったというのが、私のまずの第一印象でございます。これだけ日本の中でスタートアップ、最先端の様々な技術や新しいビジネスを展開する拠点になっている都市であるというのは未来を感じる都市になっていると思いました。

一方で、非常に個人的なことで大変恐縮なのですが、小倉城は私の先祖が入城したお城で、関ケ原が終わって、そこで一生懸命東軍のために戦った我が家も、こちらの九州のほうで新たな時代を作っていく出発点になった場所だということも、小倉城の中で様々展示されているものを見ながら思いました。そういったフロンティア精神みたいなものがこの地に根づいているのかなと思いながら発表のほうを聞かせていただきました。

ちょっと前置きが長くなりましたけれども、まず、片山副市長にお聞きしたいのですが、これだけスタートアップの数が、出現率１位ということで、一方で、これは日本全体の課題でございますが、少子化で人口減少というのは避けられない状況があると思います。スタートアップというと、やはり若い方々の様々な着眼点と、そして、北九州の場合は、かつてからある製造業とのミックスなどで、こういった出現率の結果というのが出ていると思うのですが、この地方創生を行うに当たっては、分かりやすい数で言うと、やはりそこに住む人たちが増えていくということが全てではないのですが、一つの目安にしている中で、これだけのことが進んでいっている中で、人口ということに限らないのですが、市政からご覧になったときに、どういう効果が現れているのかというところを伺えればと思っております。

○増田座長　それでは、片山副市長、どうぞ。

○片山副市長　なかなか効果が現れるまでにはなっていないのですけれども、実は北九州の場合、一番の課題というのは、人口、20歳から25歳までの女性が毎年1,000人以上転出超なのです。出る人が多くて。ここの部分をどうするかというのが課題になっていて、ということは、一番の課題というのは、やはりそこの部分の雇用力がないのです。ものづくり。いろいろなことについては働く場所はたくさんあります。でも、彼女たちが望む仕事がなかったというところに、先ほど言われた人口に対するコミットとかいろいろな問題があったと認識しておりまして、では、その方たちが働きたくなるという場所をいかに提供していくか。ところが、大企業優先の町だったので、それができなかった。

それを、スタートアップということになって、身近に自分たちもコミットできる、仕事にコミットできるという場を増やしていくということで、その課題を解消しようとしているということで、まだ具体的にはなりませんが、実は、昨年60年ぶりに人口の社会増が実現したのです。今までは自然減、社会減、ダブルパンチだったのですけれども、社会増が実現したというのは、やはり、ある程度は、そこの部分の雇用に対するコミットができるようになってきたのかなと思っています。

青木さんが先ほどちょっと言われたのですけれども、実は北九州は共稼ぎの率がとても低い町なのです。お父さんが仕事に行ってお母さんがちゃんと家庭を守るというのがまだ多いのと、先ほど言った女性が働くチャンスがなかなかない。

実は、イギリスのある保険会社が北九州に出てくるときに、TOEIC900点の人が時給1,000円で雇える町。これはどういうことかというと、そういう方々が奥様として家庭におられて、実は働きたい仕事があったら出ていくのだけれども、なかったので家庭の主婦をしていました。でも、募集があったら面白いから行ってみましょうということになったということで、その辺に気づいたことが、やはりスタートアップをいかにやっていくかということになったと思います。答えにはなっていませんが、そういう状況です。

○増田座長　ありがとうございます。

それでは、何かございましたら、またおっしゃっていただければと思います。

オンラインの小林委員から合図がございました。小林委員、どうぞ御発言ください。

○小林委員　小林と申します。よろしくお願いします。

２点質問させていただければと思います。

１点目が、福岡さんに御質問なのですけれども、私自身は福島で会社を経営しているので、この日本一起業家に優しい場所になるという言葉に、羨ましいなと感じたのが率直なところです。

いろいろお話を伺って、本当にこういう体制が各地にあったらありがたいなと思う一方で、なかなか難しい、極めて困難な部分もあるのではないかなと感じている部分もありまして、実際に、ここまでの支援体制だったりエコシステムを作っていくに当たって、ぶっちゃけ苦労した点とか、まだうまくいっていない点というところ、ぶつかった壁みたいなところがあれば教えていただけたらうれしいです。

２点目が、青木さんにお願いしたいのですけれども、ぽろっと、北九州で女性がまだ活躍できていないというお話があったかと思います。ここの、青木さんが感じている率直な背景とか理由みたいなところを教えていただけたらうれしいです。

以上です。

○増田座長　それでは、福岡さん、どうぞお願いします。

○福岡氏　御質問、ありがとうございます。

おっしゃるとおり非常に難しい部分があると感じています。大前提として私はいつもほかの地方の方々とコミュニケーションを取るときに言うのですが、北九州のやり方をほか

の都市で再現することは無理だとお伝えしております。なぜなら、日本全国各々にすばらしい町があるのと同様に、北九州には北九州の強みがあるし、小林委員のいらっしゃる、福島には福島にしかない強みがあると思います。地域のアセットをしっかりと活用しながら、スタートアップに限らず新たなイノベーションを起こしていくということが必要かなと思っています。

壁みたいな話でいくと、正直に申し上げますと、7年前、COMPASSを立ち上げた時は、北九州に存在するスタートアップ企業は片手で数えるほどぐらいしかいなかったです。
最初に取り組んだことはプレーヤーを増やしていくことでした。ただ、やると覚悟を決めるのは起業家でしかないので、どうやって機運を醸成するかみたいな話になったときに、やはり初期のフェーズは、先行した事例を持っている東京の人たちを呼んで話をしていただくなど、イベントをすることよって機運を作っていきました。

機運醸成フェーズがおわり、次に来た壁は資金で、いわゆるリスクマネーの集積でした。先ほど竹山さんも話してくれましたがリスクマネーが地方にどう集積するかみたいな壁でした。最近でこそ地方にベンチャーキャピタルがいたりしますが、やはり七、八年前の段階ではそのような状況ではなかったです。そのとき、とった手段が、私自身が上京し東京のベンチャーキャピタリストの人たちと強いつながりを作るみたいなことをやっていました。もともと営業あがりなのでそういうのが得意だったりもしたので。

ベンチャーキャピタルの方との対話の最後は「次は、北九州のおいしい飯をアテンドするので来てください」みたいなことを伝えて、とにかく泥臭くやっていました。

またコロナの影響特に大きかったとも感じています。東京や海外のベンチャーキャピタルの方々と起業家がオンラインでミーティングして投資が決定するようなことも起こっていました。

目下、現在の課題の一つは、人材だと思います。起業家もそうですし、起業家を支えうるスタートアップ関係人口が中央に比べると足りていません。人を連れてくることは簡単なことではないので、個人としては生み出していくしかないと思っています。ゆえに、そういったプログラムをこの令和7年度から開始するため準備しています。
段階をよって発生する壁が異なるため、打ち手を変えていきながらやっていくということしかないかなと思っています。

質問に対する回答にちゃんとなったかが微妙なのですけれども、一旦お戻しします。

○増田座長　ありがとうございました。

それでは続いて、青木様、どうぞお願いします。

○青木氏　御質問いただきまして、ありがとうございます。

女性があまり活躍し切れていない背景のようなところを御質問いただいたかなと思っております。

ここは、一つ大きいなと思うのは、文化的なところが非常に大きいのかなと思っています。私、出身は東京でございまして、東京にかなり長い時間おりました。人生の半分以上

は東京で生活をしておりましたが、そのときの、自分の中学生とか高校生の頃の例えば同級生とかの動向を見ていると、結婚したからといって仕事を辞めない。働き続けて、皆さん普通にずっと、今、結婚しようが子供を持とうが働き続けるのが当たり前だという世界でずっと私としては生きてきて、それが当たり前だと思っていたのですけれども、北九州に来てみて思ったのは、そういう人がとても少ないと。

実際に自分が経営を始めて、人を雇う立場になってみて思うことは、結構、私たち、特にディープテックな部分だということもあって専門的な人材が結構必要だと。特殊な細胞培養ができるような人が欲しいとか、半導体プロセスができるような人が欲しいとか、そういうことをするわけですけれども、そういったときに、普通に正社員を募集しても来ないので、専門派遣の会社を使ったりすることが結構ございます。そういった方々から御紹介される方は非常に女性が多いのです。これがすごくびっくりすることなのですけれども、正社員で募集して、そういう方々が手を挙げてきてくだされば もうちょっと安く済むのにとか思いながら、派遣会社さんを通じてそういった方々に来てもらうわけですけれども、結構そういう人たちともよくお話をします。

そのような背景もあって、私の会社では、なぜか女性のほうが圧倒的多数という状況に今なっておりますが、その文化的なところがあるというのは、九州なのか日本全国、地方がそうなのかというのは私も分からないのですけれども、ここですごく発言がはばかれるのですけれども、御主人ストップとか御主人の御家族ストップみたいなことは少なからずあるのではないかなというのを、実際に働いていただいている女性の方々からお伺いすると思う次第でございます。

そして、また、皆さんがそういった環境で働かれてきて、私の場合は、自分の同級生がずっと働いているのが当たり前と思ってきましたけれども、その方々は、自分のお母さんとか姉妹とか自分の同級生が、働かないのが当たり前という世界で生きてきたわけなので、ここに何も疑問を持たずに今まで来たのかなというのが率直に感じるところでございます。

また、こういった方々を頑張ってやっと引っ張り出せて働いてもらっても、「扶養の範囲内でしか働けません」と。多分そこが彼女たちの妥協点なのだろうなと思うのですけれども、私としては、そこを何とか打破してほしいなと思うわけで、103万の壁みたいな議論もありますけれども、そこを、103万を何万に上げるとかそういう話ではなくて、そもそも扶養みたいな考え方も取っぱらってほしいなと個人的には強く思うわけでございます。

これが北九州だけなのかなと思うと、実はそうではなくて、全国的にこういうことがあるなと思った側面も一つありまして、私、海外のアクセラレーションプログラムで、University of CaliforniaのバークレーでSkyDeckという、結構、ディープテック系だと有名なアクセラレーションプログラムがあって、そこに以前参加したことがあるのですけれども、そうすると、世界中のいろいろな国の学発のディープテック系のスタートアップを創業した方々がわんさかやってきて、結構いろいろな国の人たちとお話ししたのですけれども、アメリカの人たちもヨーロッパの人たちもほかの国の人たちも、皆さん「女性が少

ないんだよ」というのを女性が言うのです。

ただ、日本からそのとき30人ぐらい行っていたと思うのですけれども、女性は私１人だったのです。多分、行っていた女性の数は日本が一番少なかったのです。なので、恐らくこの流れは、北九州市だけの話ではなくて、全国的にそういうものが、現時点での数字としては出ているのかなというのが感じるところでございます。

ちょっと取っ散らかりましたけれども、こういった形が背景かなと。あと、現状かなと感じているところです。

○増田座長　ありがとうございました。

小林さん、追加でというか何かございますか。

○小林委員　ありがとうございました。

今まで会議でも、やはり女性のやりがいとか働きやすさみたいなところ、あと、アンコンシャスバイアスの議論はいろいろあったと思うのですけれども、正直、今のお話のような御家族ストップみたいなことは、あまり私の中でも想定していなかったというか、確かになと。福島でもあるなというところはあるのですけれども、実際問題として、そこら辺どうなのかというところは考えていかないといけないのだろうなと思っています。

○増田座長　よろしいですか。また何かあったら合図をしてください。よろしくお願いします。

それでは、これもオンラインで桑原委員から合図がございました。桑原委員、どうぞお願いします。

○桑原委員　新潟県中魚沼郡の津南町長、桑原悠と申します。

本日はすばらしいお話をありがとうございました。コメントになりますが、お話をさせていただきます。

今ほどお話を聞いておりまして、私も小学生２人の子育て世代なのですが、九州で子育てしたいと、教育が非常に羨ましいと思って聞いておりました。様々な勉強会で、福岡市長や北九州の武内市長、また、熊本の大西市長などと御一緒する機会がありまして、協力といいますか連携、非常に仲がよくてすばらしいなと。それが九州の経済の牽引力につながっているなと日頃思っているところです。大変刺激を受けました。

これまで地方創生は、全国1,700の自治体が、地元のそれぞれのいいところを伸ばそうということで、割と競争といいますか、そういったところが強かったと思いますけれども、九州のお話をいろいろと聞いておりますと、協力とか地域間のエナジーが生まれていて、自分たちのエリアに閉じていないといったことを非常に強く感じております。

これからの地方創生に求められるということは、隣の地域に求められているのは何かとか、遠くの地域でも、我々が価値を提供できるものは何かという動き方だと思っております。友人関係でも同じようなところがありますけれども、「自分が」「自分が」という発想では、なかなか交友関係がうまくいかないところかと思います。自分について考えて整理することも大事かと思いますけれども、それと同じぐらい、友人がどういう人なのか、

どういうことで困っているのか、そういう気配りも大事だと考えております。

このように、自分の強みを押し出すという、世に言うプロダクトアウトという発想から、自分たちが解決できそうな困り事を探して、それを解決するマーケットインの発想で、九州の連携でしたり、九州の産業を考え直すということが非常に進んでおられて、刺激を受けたところであります。こういう活発な議論がうちの地域でも起きるように、町だけではなくて、周辺の市などとも連携しながら協議をやっていきたいと思っております。

感想ですが、以上です。

○増田座長　桑原委員、どうもありがとうございました。もし、何か質問があれば、また合図していただければと思います。よろしくお願いします。

それでは、続きまして、河合委員からどうぞお願いします。

○河合委員　河合と申します。

今日は本当にありがとうございました。もっと長くプレゼンを聞いていたいなという方が何人もいらっしゃいましたけれども、短い時間で本当にありがとうございました。

また、私、北九州市は何度も訪問しておりますけれども、来るたびに、また新たな行動的な方々に出会えるなということを絶えず思う場所でありまして、今日も本当にいい出会いができたなと思っております。

皆様のお話を今日伺っていて、地方創生全体の話として捉えたときに、やはり２つ言えるなと思いました。

地方創生の課題というのは山のようにあって、今回、地方での開催４回目ということで、それぞれにテーマを設けていろいろなお話を伺ってきましたけれども、やはり肝というかポイントになるのは、その地域がいかに稼げる場所であるのかということであるということです。人口が減っていく状況は日本中で続いてきますので、どこの地区もこの先人口が増えるという前提は持てないわけでありますが、その中でいかに稼ぐ状況を作っていくのかということを政策の基本の中の一番上に持ってこないと地方創生の話は進んでいかないのだろうということを今日改めて感じました。

そして、もう一つは、今日はスタートアップの事例がかなり多かったわけでありますけれども、スタートアップも当然ですが、やはり、地方創生を国土形成の全体で考えてみますと、日本一律に稼ぐ状況を作っていくということももちろん大事なのでしょうけれども、既に産業とか企業の集積地になっている場所、そして、その中でも、とりわけ、日本の場合はものづくり、製造業を中心にこの先も多分経済を伸ばしていかざるを得ないだろうということを考えていきますと、既存の企業、産業の集積地をいかに勝てる状況にしていくのかということを、かなりポイントとして示していくような政策の打ち方というのはどうしても大事になってくるのだろうと思います。

現状の人口の多寡、多い少ないというのはもちろんあるわけでありますけれども、人口減少問題の専門家としてずっと研究してきた私の立場から見ますと、この先、人口減少社会における我が国を最後まで引っ張っていける地区というのは、実は工業を中心とした産

業の集積地です。例えば名前を挙げますと、この北九州市もその一つであります。名古屋市、広島市、浜松市、こういうところをいかに、これまで以上に、世界の中でなくてはならない産業集積地として伸ばしていくのかということです。それぞれの地域で既存の企業の産業はそれぞれ違うわけでありますので、その特徴ごとにやっていかざるを得ないわけでありますが、重点的な政策というものを考えていかなければいけないなと思いました。

そして、今日の発表者の皆様の話を聞いていて、意を強くした部分がすごくあったのですけれども、その一つが、この先の新たな産業を育成するには、実は地方のほうがやりやすいということなのです。

今日、多分、何人かの発表者の皆様から出てきたお話だったと思うのですけれども、人と企業の関係が近い、強いというお話もありました。また、行政との結びつきがやりやすいという話もあったと思うのです。北九州市の皆様の取組はもちろんのことでありますけれども、今までのような大都市に資本が集まって人も集まって、だから企業が育ちやすいという、経済成長期以降の日本の成長の仕方とは違う軸というものがもう見えてきているし、人口が減っていく社会では、そういう違う軸をむしろ育てていかなければいけないということを考えていきますと、今日の発表者の皆様の取組の中で、とりわけ企業のサポートをされている福岡さんとか竹山さんのような、事業をきちんと政策的に後押ししていく必要があるのではないかなということも思った次第であります。

あと、一点だけ御質問をさせていただきたいのですけれども、本当は全員にお聞きしたいところですが、代表して米澤さんにお聞きしたいです。

私も、今、研究者の研究テーマをどう社会実装していくのかというプロジェクトに取りかかっていることもあって、すごく関心を持ってお話をお聞きしていたのです。研究者が論文等々で、自己完結と言ってしまっていけないかもしれませんけれども、研究者としての成果を出していくというのは職務上の一つの在り方なのだろうと思うのです。しかし、研究の成果をいかに社会実装していくのかというときに、実務者が必要であるというお話があったと思います。この実務者というのは、具体的にどういう人たちを指しておられるのか。今、取り組んでおられる中で、こういう実務者の人たちに活躍してもらっている事例があれば御紹介していただきたいですし、もしそうでなければ、こういうようなイメージの実務者が必要なのだということを御紹介いただければと思います。

以上です。

○増田座長　それでは、米澤さん、どうぞお願いします。

○米澤氏　御質問、ありがとうございます。

世界でもいろいろなディープテックスタートアップを大学から創出している中で、我々もいろいろ調査したり、ベンチマークしたり、私自身も研究をしていた頃は、ドイツとかヨーロッパとかとの共同研究等で連携も深かったので、そういったところでも何となく知っていたことなのですけれども、やはりキーはポスドク、そして、博士学生です。やはりディープテックを使った事業を創出しようとすると、原理的なところからしっかり理解し

た上で、その価値をどう産業につなげるかというのが理解できないといけないので、やはり博士学生、博士人材というのが重要だと思います。

まさに日本国としても博士人材を改めて増やさないといけないという施策が動いていますが、まさに、このディープテックスタートアップをどう増やすかというのは、博士人材、博士学生をどう増やしていくかというところに直結すると思います。

しかしながら直近、5年で増えるのかというと、なかなかそこが増えないというのは分かっていますので、九工大としては、そういった博士を持った方々で、社会で活躍している人たちを、何とか大学のほうで活躍いただけないかという形で呼び集め、そして、そういった九工大で学部とか修士で研究している人たちとの接点も増やす中で、博士に行くと、残念ながら学者へのパスみたいなところのイメージがまだまだ強いところがあるので、もちろん学者として大成したい人にとっても博士号というのは大事なのですけれども、そうではなくて、まさにそのディープテックを使った社会実装、事業化というところに博士号が重要なのだという、そういった認識の人たちが集まれるような、そういった人材育成とエコシステムというのをこれから九工大としても仕掛けていこうと思っております。

我々も、今、博士学生に、そういった学内インターンシップみたいな形で、少し給料を払うので、社会実装活動をやりませんかという形で、多様な経済支援を博士学生の方々に提供可能とすることで、経済的な理由で少なくとも博士を諦める、そういった状況をなくしていこうといった仕掛けも、今作っているところにあります。

以上です。

○増田座長　ありがとうございます。

私も、大学におられる米澤先生がいらっしゃるので、ちょっとピンポイントの質問になるので恐縮ですけれども、教えていただきたいです。

九州工業大学は恐らく、今おっしゃったようなディープテックとか、テクノロジーをかなり深く勉強する場なので、そこに行かれる学生さんは、ある程度覚悟を決めておられるし、私も以前大学で教えていましたが、世の中一般的に、学生の皆さんは大学へ行って勉強されて、社会に出るというときに、聞くと案外、一般論として親の影響というのは結構あって、何か新しい分野だとか、ITの新しい企業だとか、それから、皆さん、起業・スタートアップでも志を持ってやるので、そんなものは吹き飛ばしてしまうのでしょうけれども、そういう、誰か仲間がスタートアップで少し先輩の人がいる。そこに自分も行ってやりたいと。もっともっとすばらしい、世の中に貢献したいみたいなこと考えて、いざとなるときに、どうも「そんな聞いたことのない会社、やめとけ」とか、そのような話が少し聞こえてくる分野もあります。

ちょうどたまたまおられるので、ほかの方にも聞きたいところであるのですが、九州工業大学で、例えばそんなような話があるのかないのか。あるいは、そういうのが聞こえた場合に、どのようにして学生の背中を後押ししているのか、その辺りを教えていただければと思うのです。

○米澤氏　ありがとうございます。

まず、今の質問については、かなりその影響はあると思います。やはり、いい面、悪い面があるのですけれども、日本の方々は安定志向の方々が多いということで、特に、実は九州工業大学は、就職はすごく優良企業、昔で言うと一部上場企業のところにエンジニアとして入るという割合がかなり高くて、就職のいい大学ということで結構知られている大学です。言い方を変えると、あまりこの表現は好きではないのですけれども、「コスパのいい大学」と言われていまして、学力はそこそこなのだけれども就職先はすごくいいところに行けるというところで、コスパの、まず、そういった思考で入っている学生さんも多い。それは、親側の影響というのももちろんあると思います。

そういう中で、やはり我々が、今、思考しているのは、その文化を変えていくというのも中長期目線では大事なのですけれども、ある意味、それが日本社会を豊かにしてきた強みというか価値でもあったと思います。そうしたら、その価値自体は否定してはいけないのかなと思っておりまして、まさに失敗しても再チャレンジできる、そちらの安心感、どうそこを生み出すかというところが重要だと思っておりまして、この後、サイトビジットにお越しいただける九工大のGYMLABOというところも、私が立ち上げの企画等もさせてもらったのですけれども、まさにコンセプトは「失敗できる場所にしよう」と。「チャレンジできる場所にしよう」と。そういったところで学生とも一緒に作っているわけです。

我々が今考えているのは、先ほど博士学生がどうこうとお話ししましたけれども、その実務者というところも、まさにスタートアップ、作っていただく、すごい覚悟でやらないといけないと思います。かなりリスクを負ってやっていただきます。失敗したとしても、また、九州工業大学で、次の何かネタを探してもう一回チャレンジしませんかと。そのチャレンジのときは、九州工業大学でまた雇用させていただくので、そういった形でチャレンジしても次の機会がまた得られる。そこの仕組みというのは作っていきたいなと。

同時に、これは大学のずるいところで、大学というのは研究機関でありながら教育機関という役割を持っています。この果敢にチャレンジして失敗したことは教育のネタとして非常に重要なのです。この失敗してしまった、それは、すごくいろいろな学びが得られるので、まさにそれを、今度は教育の価値として学生に展開していく。そうやって、教育と研究を武器にする大学の、そういったそもそもの特徴を生かして、さらに発展、貢献をしていきたいなとは考えております。

○増田座長　どうもありがとうございます。再チャレンジの話がいろいろありました。

ここで、今日御欠席の芳野委員から御質問がありまして、望月次長から芳野委員の御質問を読んでいただいて、これは片山副市長にまずお聞きしたいということです。それでは望月次長、お願いします。

○望月次長　日本労働組合総連合会会長の芳野委員から質問をいただいております。代読させていただきます。

「最近、スタートアップを目指す女性へのハラスメントが問題になっています。特に、

資金調達を含め、支援者との間には大きな力の差があり、女性に限らず男性もハラスメントが原因で挑戦を断念せざるを得なかったとの話もあります。市としてスタートアップ支援を行っている北九州市におかれては、どのようなハラスメント対策を行っておられるかお聞かせ願います」。

以上でございます。

○増田座長　それでは、片山副市長、お願いします。

○片山副市長　今、芳野委員から御指摘あったようなハラスメント事案については、男女を問わずなくなっていないと。あるということについては我々としても認識をしております。

スタートアップのハラスメントに限定した話ではないのですけれども、やはり女性が不本意にキャリアを諦めずに続けていくこと。女性の能力を十分発揮できること。そこの視点をするためには、まず、スタートアップであるとすると、僕は顔を知る、要するに、例えば伴走する方が、その方とのコミュニケーションを取っていくということで、もしそういう場面に遭遇したときには、まずぱっと話せるということをするのが一番重要かなと。

それから、例えば、市が紹介したベンチャーキャピタルに行くとか、例えば、国にある程度登録しているところに行くとか、そういうところをきちんときめ細かにやっていくということが一番重要なのではないかなと思っています。

特に北九州は、新しい市長になりまして、女性を前面に掲げまして、女性が自分らしく輝ける事、今おっしゃられたような視点についても一番最初に出していく、それを具現化するために、北九州というのは若者や女性に選ばれる地方というのを前面に出していくということをすることによって、地域としては、北九州のスタートアップというのはそういう問題が起こりにくいということをまず醸成していくということが重要かなと。ですから、まずは顔見知りになるというのが一つと、もう一つは、北九州とはそういうことがない町だというのをきちんと出していく。北九州の、ある程度、紹介したところとタッグを組んでやっていく。そういうことで、先ほど言われた疑問点を少なくしていく、そういうことを考えていくということです。

○増田座長　どうもありがとうございました。

河合さん、御質問をどうぞ。

○河合委員　河合でございます。

竹山さんの資料の中に、北九州市だけではなくて、瀬戸内海エリアだとか九州全体のという構想の御紹介があったわけでありますけれども、私は、これはすごくポイントなのだろうなと思っております。北九州市に限らず地方創生の話になると、どうしても、そこの基礎自治体の人口が減っていかないようにしていくとか、地域が衰退しないようにしていくという発想になりがちなわけでありますけれども、今後の日本においては、先ほど申し上げたように、人口が減っていくこと、また、高齢化が進んでいくことを前提に物を考えざるを得ないわけです。そうなると、基礎自治体という狭い世界の中をどう勝ち残れる場

所にしていくのかという発想よりも、もう少し広域に地域というものを捉えていくという観点はすごく大事になってくるのだと思うのです。

北九州市の場合には、広島市だとか松山市だとか、近いところで言えばお隣の大分市だとかという連携の相手が考えられます。大分市の場合は人口規模もそれなりにいて、産業もかなり均衡的に立地している珍しい地方都市の一つであって、大分市と北九州市が手を結んでいろいろな交流を深めていくと、もっともっと選択肢が増えていくということに多分なっていくのだろうと思っております。

竹山さんにお伺いしたいのですけれども、広域的に何か取り組んでおられることがあるのかということです。また、ものづくりで今後を考えていくと、例えば、社会基盤の活用においても、空港の貨物空港化を目指していくだとかが考え得るのですが、貿易港を北九州港だけではなくて、ほかの港とどう連携していくのかだとか、いろいろなテーマがある中で、よその地域の人たちと具体的に何か進めておられるようなことがあったら御紹介いただければと思います。

○増田座長　それでは、竹山さん、どうぞ。

○竹山氏　御質問、ありがとうございます。

まだ構造的にお話しできる状態にはなっていないのですけれども、ベンチマークの話から２つの論点でお話ししたいなと思います。

ベンチマークはやはり深圳かなと思っています。深圳は電子基板が強い町で、でも、珠江デルタという湾になっているところに東莞があって、深圳もあって広州もあってみたいなところで、それぞれケイパビリティが違う地域が混じり合って、しかも、交通も行きやすくなってエコシステムを形成しているみたいなことで言うと、北九州もそれができるのではないかなと、まず１つ思ったところです。

そういったときに、まず手前側でやっていることでいうと、ここは泥臭くやっていまして、例えば、北九州は、鉄、金属、樹脂、半導体のものづくりの材料とエコシステムはそろっているのですけれども、正直、電子基板は弱いといったときに、半導体の後工程の工場などを誘致して、そこから少しずつエコシステムができてくるのですけれども、今、そこが強いところで言うと熊本です。TSMCがあってエコシステムが出来上がってくる。そうすると、ものづくりの全体的な物を作る、ハードウエアスタートアップ、ディープテックスタートアップが、プロトタイプを作ろうと思ったときに、深圳に行かないといけないというところが、北九州をハブにしてもらったらいいよと。電子基板だったら、もしかしたら熊本に行くかもしれないけれども、ここをハブにしてもらったらつないでいくよと。皆さん、探せないでしょうと。町工場のレベルで僕らはネットワークを広げ続けていて、熊本のコミュニティと連携を始めたり、そういう動きをしています。

瀬戸内のエリアで言うと、ファンドに出資をしてもらって、製造開発以外のところで言うと販売も大事なので、北九州のコミュニティを中心にプロダクトを作ったあとに、使ってもらう顧客、北九州でフィットする顧客がいなければ、我々の出資者の岡山のこの会社

に使ってもらうとか、この会社と一緒に実証実験する。これが２つ目です。

そういうことで、作るところ、あるいは売るところを、一旦、瀬戸内のエリアと九州のエリアで完結させて、プロダクトが仕上がってマーケットフィットが見えてくれば、東京だけでなくて、物理的に北九州はアジアに近いですから、アジアにマーケットインしていくみたいなことを、今、構想し始めていて、一歩ずつ、頂上が深圳だったとしたときには、まだ１合目に入ったぐらいのところで活動しているという状況です。

以上です。

○増田座長　それでは、細川委員、どうぞお願いします。

○細川委員　最後、１つだけサーズさんに質問させていただきたいと思っているのですけれども、米澤さんにも少し関わることかなと思いますが、先ほど、ポスドクのお話があったと思うのですが、海外にいる日本人の学生とか、あるいは、海外の学生、その方たちにこちらに来ていただくに当たって、例えばインターンというのも、例えばアメリカでは学部生から有給で長期のインターンをします。長期といっても夏休みの二、三か月ということになりますけれども、日本のインターンシッププログラムというのは、特に学部生は、１日とか、長くても１週間とかで、なおかつ無給であって、なかなか日本でインターンをしようという方向に目が向かないということもあると思います。

特に、外国人の学生の方が日本でインターンをするというのは、何か本当に強固なご縁がないと来ない。でも、そういう方々も採っていかないと、日本全体にとっては、人も足りない、あるいは、様々な多様性であるとか、レベルアップを図っていくのは難しいという中で、サーズさんは、ここならば、福岡ならば暮らしていけると思われた中で、そういった外国人の学生とか、外国人を呼んでくる上で、どんなことが現状足りなくて、いろいろあるのかもしれませんが、何かそこで強く感じられていることを伺えればと思います。

○増田座長　それでは、サーズさん、どうぞ。

○サーズ氏　質問、ありがとうございました。

まずはアイデアとしては非常に賛成です。世界中に日本のファンはたくさんいますが、多くは日本に住んで仕事ができることが可能だと思っていないのです。まだたくさんの課題があるのですが、例えば、受皿。大学や企業にプログラムとしての受皿があれば、海外から来たい人は多いので、力になると思います。

○増田座長　米澤さん、何かありますか。よろしいですか。

○米澤氏　ありがとうございます。

おっしゃるとおりで、大学としても世界的なそういった若者だったり、我々、九州工業大学も、18歳に限らず、全世代に対してそういった高度教育を提供していくのだという戦略に切り替わっていますが、まさに、世界のそういったエンジニアリングを学ぶ学生がまず集まるような大学にしていきたいというのはおっしゃるとおりだと思います。一方、比較的、大学院になってくると、今度は結構留学生の比率というのは実は高くなっています。特に、博士号までいくと、かなり留学生の比率が高くなっております。

今度は、もう一個の課題は、そこで学んだ留学生の方々が、先ほどの日本人もそうなのですけれども、地元に残ってくれないということになります。彼らも結構愛着が湧いて、北九州で働きたい、福岡県で働きたい、このエリアで働きたいと言ってくださる方は多いのですけれども、今度は、博士号取得者とかの就職の仕組み自体が、通常の就活のスキームに乗らないという問題と、ますます留学生を受け入れられる体制のある企業が地域に少ないということで、行けて関東・関西にやはりなってしまう。もしくは母国に帰らざるを得ないということです。

九工大は特に宇宙に強いというお話をしましたけれども、宇宙の領域などは、特に留学生は世界中から集まってくださっています。世界的な一大拠点になっていますが、残念ながら、では、日本に残ってくれるかというと、なかなか、そういった活躍の場もないという、いろいろな理由も複雑にありますけれども、なかなかそういう場も提供できていないがゆえに、母国に帰ったりまた違う、欧米のほうに行ってしまうとか、そういったいろいろなことも起きていると思いますので、入りを増やすというのもおっしゃるとおりですし、やはりその方々が活躍できる、今度は場所も作っておく、そこを両輪で進めていかないといけないのかなと思っています。

○増田座長　どうもありがとうございました。

あと、時間が５分ぐらいになってしまったので、特にオンラインの方もなければ、こちら、有識者側からの御質問やコメントはここまでとさせていただきます。今日は大変貴重な御意見を頂戴しました。ありがとうございました。

最後に、私から一言だけ申し上げたいのは、何回か地方でも色々とこのような意見交換をさせていただいていますが、これだけスタートアップの皆さん方のお話を集中して聞くのは、多分、北九州だからできたのではないかなと思います。

色々な御説明がありましたし、それから、片山副市長からここの歴史的な位置づけのようなお話がございまして、様々な理由で、大企業の、しかも、ものづくりの企業がここに立地して、全体的なそういう関係のベースがぐっと上がっているところに、皆さん方のような多様な志を持った方々が集まって、しかも皆さん、随分お互いに顔見知りの部分があるようでして、エクセレントな人を集めると結局、普段から顔見知りというところがあるのかもしれませんけれども、そのようなことが、もの凄く仕事をやりやすくしている部分がまたあるのではないかなと思いました。

ものづくり、製造業的な部分はやはりテクノロジーであり、それから、お金であるとか、いろいろ分解できるところがあると思うのですが、最後はやはり、そういったお互いの、彼がやろうとしているのだったら資金をこのように融通しようとか、何か人間的な信頼関係みたいなものがどこかベースにないと、多分うまく回っていかないのだろうと思いますので、そういう面でも日本で一番、今、この地域が先を走って、ぜひ、それを、地方創生という文脈の中でも、またいいモデルをどんどん作っていただければなと期待しています。

ここ数日、この場で言ってもしようがないのですけれども、トランプ氏の相互関税のよ

うな話が出てくると、ものづくり、製造業は、日本の中で人口が縮小してニーズが細っていくわけだから、やはり外に出していくことを考えなくてはいけない、あのように壁を建てることは全く困るなと思うのですけれども、逆に言うと、サービス業は逆に縮小していく中で、インバウンドをどれだけ呼び込むかということが非常に重要になるので、サーズさんのような役割は物すごく貴重になりますし、福岡というか博多、サーズさんは別に博多中心ではなくて九州全体を見ていろいろやっているのでしょうけれども、福岡と北九州の役割分担も含めて、やはりこの地域全体がどんどん伸びていけばなと、こんなことを思った次第でございます。今日はどうもありがとうございました。

それでは、最後になりますけれども、北九州市の副市長、片山さんから、御当地でやるにつきまして色々な準備を手配いただきましたので、最後に片山副市長から御挨拶をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

○片山副市長　まずは、この会議の場を北九州市でしていただきまして、本当にありがとうございました。また、この会議の開催に御尽力いただいた皆さんに感謝を申し上げたいと思います。

非常に限られた時間だったのですけれども、日頃、顔も分かっているのですが、具体的にいろいろ話を聞くのは初めてだったので、皆さん、別々に聞いていたものですから。そういう意味合いでは、我々、やらなくてはいけないことがたくさんあるなというのが印象です。

今日はおっしゃいませんでしたけれども、実は、よその都市から来て、やはりこの町を変えようという人たちが最初は来るのですけれども、例えばサーフィンが好きな人が来ますよね。「若松北海岸、サーフィンいいですよ」って言って連れて行くと、シャワーを浴びるところがないから自分でポリタンクを持っていってかぶらないといけないということになると、やはり湘南に帰ろうかなと。やはり地元側の受け入れるためのライフスタイルを実現できるというようなところも少し作っていかないと、なかなかスタートアップの人たちにとって魅力ある地域になっていないと。それを全部やれということではないけれども、やはり、そういうこともちょっと感じたのです。

先ほど、サーズさんがおっしゃった、向こうに福岡のことを発信したから来ていただいたと。こんなところが悪いよ、いいところがあるよとか、それをもうちょっとやっていくべきだなと、特に今日は感じました。

スタートアップの第一線で御活躍をされている皆さん、先ほど申し上げましたとおり、社会動態が60年ぶりにプラスになったというのは、まさに皆さん方の成果だと思っています。これからますますスタートアップに力を入れていこうと考えておりますので、これからも引き続き地域のために力を貸していただきたいと思います。

最後になりますけれども、本日御出席の皆様の御健勝とますますの御活躍を祈念いたしまして結びの挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

○増田座長　どうもありがとうございました。

片山副市長、そして、発表者の皆様、会議の円滑な運営に御協力いただきまして感謝申し上げたいと思います。

それでは、以上で本日の会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。